

# 浅見貴子

Takako Azami

ざわめく空気が流れる  
—浅見貴子の幸福と不穏

小勝禮子

浅見貴子は、雲肌麻紙に岩絵の具、墨による表現を一貫して追及してきた画家である。一時、朱や銀箔に心を惹かれたこともあったが、いまは墨の濃淡を基調としたモノクロームの表現に戻っている。1990年代も後半になってから、彼女は、深い闇の漆黒から、はかない薄墨の痕跡まで、驚くほど豊かな黒から灰白色にいたる諧調によって、漂い、流れる空気の表現に移行してみせた。

浅見自身の言葉によれば、部屋の中の空気の粒の動きが、子どもの頃から妙に気になっていたという。「ブラウン運動」という、科学で説明できる微粒子と気体の分子の衝突による不規則な運動が目に捉えられるほどに、幼い頃から浅見は鋭敏な目の人であった。90年代末の《精》のシリーズでは、浅見は、細かい線や点の集積によって、サラサラと流動的な漆黒の闇を現出させた。

そうした空気の粒をとらえるような鋭敏な「目」は、2002年から、一躍、様式上の新境地を示した《Matsu》シリーズにも受け継がれている。ただ空気の流れは、以前のように物のかたちを微細な点に溶解することはなくなり、一筆の墨の大きな点から極小の点の並置による松の葉群と、墨の線や胡粉の白い線の交錯による枝とともに、確かな実在感を持って構成された松の樹の内部、葉と葉、葉と枝のあいだに、間違いなく豊かにはらまれているのだ。一見無造作に置かれた黒点の大小や向きや並列などから醸し出される絶

妙な動きとハーモニーは、容易に音楽を連想させながら松の枝のそよぎを体感させる。

浅見の画面は、雲肌麻紙という吸湿性のよい和紙に、水に溶いた墨や胡粉でほとんど裏側から筆を置いたもので、最終的に表に戻したときに一番手前に見える墨を滲ませた大きい点は、描いているときは最初に、一番下に置かれた筆致だという。こうした見る者の視覚の逆転からも、浅見の画面の奥行きや深さや、その裏側に入り込めそうな空気感が絶妙に創り出される。

秩父の豊かな自然の中に育ち、現在も、繁茂する庭の樹木の写生から始める浅見は、制作中の、水に墨が溶けるのを見ているときにも、自分が自然の営みのなかに組み込まれていることを感じるという。「草木が育つ、川が流れる、山がじっとしている、季節がめぐっていき、いのちが誕生する…。草木や川や山のちからを、体内に、そして画面いっぱい染み透らせている。

「ただ、この樹と向き合ったときの実感を表わしたかった」「自然はとどまるところなく再生し、進化し続ける」。浅見の述懐だが、その言葉どおり、マツはその生命に始まりも終わりもないかのように、なお伸びやかに野放図に成長を止めない。中心も極点もない、流れるような、またその意味で大胆な画面である。

自然への全幅の信頼と一体感を基底にした伸び伸びとした幸福感とともに、浅見貴子の絵画は伝統的な日本画とはまったく異なる新しさを見せながら、形ばかりの花鳥風月を越えたアニミズム的な不穏な力を宿している。 (栃木県立美術館特別研究員)